

奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色

小林 芳 規

目次

- 一、はじめに
- 二、漢文の読解を反映した敦煌文献の奥書
- 三、本邦の訓点資料において奥書に「聴・聞」「講・講師」の語を持つもの——九世紀資料と十世紀南都資料——
- 四、本邦の訓点資料において奥書に「伝受」並びに「点」「読」の語を持つもの——十世紀以降の天台宗・真言宗資料——
- 五、同一の訓点資料に異種の訓読の併存を示す用語のあるもの——十一世紀の天台宗・真言宗資料——
- 六、訓点資料の奥書に「本云」「本奥云」「点本云」等の本奥書云々の用語を持つもの——十二世紀の天台宗資料——
- 七、奥書の用語に基づく漢文訓読史の時期区分

一、はじめに

本稿の目的は、平安時代四百年間における漢文訓読語の変遷を叙述する手段として、時期区分を設定する意義と方法とその必然的理由を説くことにある。

漢文訓読語の変遷は、日本語の変遷の一面として平安時代を通じて連続した時間の流れの中で行われている。従って、平安時代の四百年を連続のものとして大きく把握するのも一つの方法であろう。大坪併治博士が『平安時代訓点語の文法』⁽¹⁾で

奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色

汎時的に扱われたのはこれに当る。しかし、訓読語が変遷するという眼で観ると、平安時代四百年の中でも、諸事象に変化が認められ、しかも同類型の事象が同じ時期を画して変化していることが知られる^②。そこで、連続した時間を区分して説くことが、事象の変化の实情とその要因を考えるのに有効となる。その場合、従来の「国語史概説書」が採つて来たような政治史的区分が先ず存してそれに合せるのではなく、訓読語の内部から独自の仕方でも区分しなければならぬ。その結果が政治史的区分と重なったり、百年という等間隔に区分されたとしても、むしろその結果からそれが訓読語の変遷を促す要因と密接に関連するものであったか否かを考えるべきである。

右のような考えを實踐する手段として、訓点資料の奥書に注目して、これを手掛りにして区分してみることにする。周知のように、訓点資料の奥書(厳密には「識語」^③)には、その訓点を加えた年月日や加點事情などを記したものが多く残存し、当該資料の訓読語との関連が知られるものが少なくはない。そこで、今まで筆者が調査し知見し得た訓点資料について、奥書を有するものを、その奥書の年月日の順に配列して、そこに見られる訓読に係る用語の異同に注目した。すると、用語に異なりが認められ、それが時期を画して使われていることが判明した。

本稿はその用語の異なりを手掛りとして、時期区分を試みたものである。その結果、それぞれの時期を担う用語が、当該の時期の訓読語の特色を反映しているものであることが知られ、この方法が漢文訓読史の時期区分に有効であることを認めるに至った。

以下に、この時期区分に従つて、各時期ごとにその時期を象徴する用語と、その用語の表すそれぞれの時期の訓読語の特色とについて述べることにするが、その前に、先ず、中国大陆において漢字文を読誦する際に使用した語句を敦煌文献の奥書を通して調べ、わが国の訓点資料の奥書に使用された語句との関係を見ることにする。わが国の訓点資料の本文である漢字文は、佛典にせよ、漢籍にせよ、本来中国大陆で作成されてわが国に伝来したものであるから、その漢字文の読誦の方式にも、中国語で読むか日本語で読むかの違いは存するものの、中国大陆の影響が考えられる所である。

その場合、中国の文化の中心地である曾ての都で書写され読誦された古写本の残存するものは少ないので、ここでは、多量に伝存する敦煌文献を取上げることとする。

尚、本稿の標題に「院政期の天台宗訓読」としたのは、『鎌倉時代語研究』誌への配慮によつて表題に出したものであり、院政期の天台宗訓読も重要な課題であるが、それだけでなく、院政期の天台宗訓読に至る、それ以前の各時期をも取扱つて、平安時代の佛書全体を対象とし、その推移の中で、院政期の天台宗訓読を眺めることが、ひいてはその位置づけを明確にし、その特色が一層浮び上ると考えられる。

二、漢文の読解を反映した敦煌文献の奥書

敦煌文献⁽⁴⁾の中には、本文の漢文を読誦・読解するために、句切点を始めその他の符号を、朱点や角筆点で施したものであることが知られている。⁽⁵⁾それに対応して、それぞれの文献の奥書に、「讀誦」「念誦・誦」「聽」「講説・講・説」「點・點勸」等の語が記されている。それらを、用語ごとに分けて、以下に掲げることとする。(傍線は筆者の加筆)

〔讀誦〕

○大比丘尼羯磨 一卷 大英図書館蔵 S.736

(奥書) 大統九年(五四三)七月六日己丑朔寫訖比丘尼賢玉所供養／比丘「尼」(顛倒符ニヨリ訂ス)賢玉起發寫羯磨經一卷願此功

德普及一切十方世界六道衆生心開／意解發大乘意崇此身命生々之處常為十方六道衆生而為導首如／三世諸佛及諸菩薩度諸衆生等无有異有能讀誦奉行此律者亦復如／是大聖玄心使崇此願必得成就果成佛道三惡衆應時解脫

角筆の合符等と、朱筆の科段点あり。

○大般涅槃經卷第二十九 一卷 大英図書館蔵 S.2231

奥書より觀た院政期の天台宗訓読の特色

(奥書) 令狐光和持故破涅槃／脩持竿得一部讀誦／為一切衆生耳聞聲者／永不落三途八難願見阿／弥隨佛
貞觀元年(六二七)二月八日脩成／乞(記)

角筆の注示符と、白書の句切点あり。

○大乘經纂要義 一卷 大英図書館蔵 S.3966

(奥書) 壬寅年(八二二)六月大蕃国有讚普印信并此十善經本傳流諸州流行讀誦後八月十六日寫畢記
角筆の句切点と、朱筆の句切点あり。

○太公家教 一卷 大英図書館蔵 S.479

(奥書) (乾)符六年(八七九)正月廿八日學生呂康三讀誦記
角筆の句切点・注示符と、墨筆の句切点あり。

○佛本行集經變文〔佛名經〕紙背 一卷 大英図書館蔵 S.548

(奥書) 長興伍年(九三五)甲午歲八月十九日蓮臺寺僧洪福寫記諸耳／僧惠定池(持)念讀誦知人不取
角筆の句切点・破音字点と、朱筆の句切点・破音字点あり。

○求諸衆生苦難經 一卷 大英図書館蔵 S.3936

(奥書) 戊戌季十二月廿五日清信弟子罹什德一心受持讀誦(顛倒符ニヨリ訂ス)
角筆の句切点・合符・声調符あり。

○妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五(觀音經) 一帖 大英図書館蔵 S.5556

(奥書) 戊申年(九四八)七月十三日弟子令狐幸深寫書／耳讀誦
(追筆) 「願深讀誦／本生衆生修久今身／

願深誦 善男子善女人」

角筆による音注・義注の漢字、科段符・句読符・合符・節博士・声調符あり。

〔念誦・誦〕

○梵網經菩薩戒序 一卷 大英図書館蔵 S.3206

(奥書) 天竺鳩摩羅什法師云此經本彼國有一百一十二卷六十四品羅什法師諷持菩薩心地一品弘治三年(四〇二)於長安

城大明寺誦出為四部

角筆の句切点・破音字点(?)と、朱筆の句切点・破音字点(?)あり。本文は六〇〇年頃写。

○四分尼戒本 一卷 大英図書館蔵 S.1167

(奥書) 比丘尼 先為師僧父母後為己身時誦尼戒一卷／龍興寺僧智照寫

角筆の句切点あり。本文は九世紀前半期写。

○佛說善惡因果經 一卷 大英図書館蔵 S.2077

(奥書) 清信佛弟子畫保員壹為先亡父母貳為合家大小莫洛(卷)三塗神生淨土謂／城惶(隱)灾(再)禮寶(保)員信心寫此

經者念誦衣(依)教奉行

角筆の句切点と、朱筆の句切点あり。本文は九三〇年頃写。

○中論卷二、三、四 一卷 大英図書館蔵 S.5663

(奥書) 己亥年(九三九カ)七月十五日寫畢三界寺律大德沙門惠海誦集(説?) (下略)

角筆の句切点・注示符・ミセケチ符と、墨筆の句切点・ミセケチ符あり。

○佛說父母恩重經 一卷 大英図書館蔵 S.1907

(奥書) 開軍(運)三年(九四七)丁未歲十二月廿七日報恩寺僧／海詮發心念誦父母恩重經一卷上寶(報?)四種恩□

角筆の句切点・斜線・抹消符と、朱筆の句切点あり。

奥書より觀た院政期の天台宗訓読の特色

[聽] ↓ [講説・講・説]

○菩薩戒本疏卷第六 一卷 大英図書館蔵 S.2500

(奥書) 天(寶)十四載(七五五)寫及聽於此戒門是真出世處行目作立沙門談幽記燉煌人也

角筆の句切点・破音字点と、朱筆の句切点あり。

○維摩經義記卷第四 一卷 大英図書館蔵 S.2732

(奥書) 龍華二儒共校定也更比字一校也

大統五年(五三九)四月十二日比丘惠龍寫記流通

(別筆) 「保定二年(五六二)歲次壬午於尔錦公齋上榆樹／下大聽僧雅講維摩經一遍私記」。

橙色の句点が全卷に亘って加點(6)されていると云う。

○金剛般若波羅蜜多經宣演 一卷 大英図書館蔵 S.4052

(奥書) 大曆九年(七七四)六月卅日於沙州龍興寺講(畢)記之

角筆の漢字(本文校異と義注)・句切点・破音字点・抹消符・補入符と、朱筆の句切点あり。

○瑜伽師地論卷第三十 一卷 大英図書館蔵 S.5309

(奥書) 比・丘・恒・安・隨・聽・論・本〔・〕は朱

(朱書) 「大唐大中十一年(八五七)歲次丑六月廿二日国大德三藏法師沙門法成／於沙州開元寺說畢記」

角筆の科段点・句切点・注示符・文字(?)と、朱筆の科段点・句切点あり。

○瑜伽師地論卷第三十 一卷 大英図書館蔵 S.3927

(奥書) 大中十一年(八五七)四月廿一日苾芻明照寫

大唐大中十一年歲次丁丑六月廿二日国大德三藏法師沙門法成於沙州／開元寺說畢記

角筆の句切点・合符・注示符と、朱筆の句切点あり。

○瑜伽師地論卷第二十八 一卷 大英図書館蔵 S.7235

(奥書) 大中十一年五月三日明照廳(應)了記

角筆の句切点・注示符と、朱筆の句切点あり。

○瑜伽師地論卷第五十五、五十六 一卷 大英図書館蔵 S.6483

(奥書) (卷第五十五の尾題の後) 大中十三年(八五九) 歲次己卯四月廿四日比丘明照隨聽寫記

角筆の句切点・合符・注示符と、朱筆の句切点あり。

○四分戒本疏卷第一 一卷 大英図書館蔵 S.3604

(奥書) (朱書) 「乙亥年(八五五カ) 十月廿三日起首於報恩寺李教授闍梨講說此疏隨聽隨寫十一月十一(日)」

角筆の句切点・合符・声調符・注示符・抹消符と、朱筆の句切点あり。

○瑜伽論第三十一卷〜三十四卷手記 一卷 大英図書館蔵 S.4011

(奥書) 談迅福慧隨聽

角筆の句切点・科段点・注示符・抹消符と、朱筆の句切点あり。

[點・點勘]

○妙法蓮華經卷第八 一卷 大英図書館蔵 S.2577

(奥書) 余為初學讀此經者不識文句(頭倒符により訂す)故馮點之亦不看科/段亦不論起盡多以四字為句若有四字外句者然點

く始/之但是四字句者絶不加點別為作為惟委別行作行闕更如此之流聊後分別後之見者勿怪下朱言錯/點也

句読点・破音字点が加點されているところ。

○文選卷第九 一卷 大英図書館蔵 S.3663

奥書より觀た院政期の天台宗訓読の特色

(奥書) 鄭家為景點訖

句読点・四声の枠を示す点・字音注記が加點されているところ。⁽⁸⁾

○四分戒本疏卷第四 一卷 大英図書館蔵 S.6889

(奥書) 寅年十月廿日於東山接統及點勘並了

角筆の句切点・声調符と、朱筆の句切点あり。

○維摩詰經卷上・中・下 一卷 大英図書館蔵 S.4153

(奥書) 申年四月五日比丘法濟共福勝點勘了

角筆の句切点と、墨書の句切点あり。

○諸法无行經卷上 一卷 フランス国立図書館蔵 P.2057

(奥書) 子年三月十日於蕃仙岸點勘訖

角筆の漢字・句切点・合符・注示符・補入符と、朱筆の句切点あり。「浄土寺藏經」の印あり。

以上が、本文中に角筆や朱筆・墨書で実際に句切点やその他の符号、更には漢字等を書入れた敦煌文献において、標示の語句を奥書に持つものの管見に入ったものである。これらによると、次の諸点が知られる。

- (一) 「讀誦」と「誦」とが、同じ文献の中で同義に用いられた「觀音經」(S.5556)のような例がある。従って、単に「誦」と書かれた場合(梵網經菩薩戒序 S.3206)「四分尼戒本 S.1167」「中論卷二」三、四 S.5663)などにも「讀誦」と同義に用いた可能性のものがある。

- (二) 「聽」が「講說」と共に、同じ文献の同じ文脈の中で用いられた「四分戒本疏卷第一」(S.6604)や、「聽」が「說」と、同じ文献の中で用いられた「瑜伽師地論卷三十」(S.5309)がある。この「瑜伽師地論」は、大中十一年(八五七)の沙州開元寺における法成の講義を恒安が随聽した折に、先ず角筆で科段点・句切点・注示符等を以て書入れ、後

- から朱筆で科段と句切の点だけを重ねて書いたものであることが原本の調査で知られた。⁽⁹⁾「大唐大中十一年」云々の朱書は随聴講者の加點本に講師の法成が記したものである。⁽¹⁰⁾法成の講義は明照も聴講して、卷二十八(28)には「大中十一年五月三日明照（聽）了記」、卷五十五・五十六(S.623)には「大中十三年歲次己卯四月廿四日比丘明照随聴寫記」のように、「聴」しか記さず、一方、卷三十(S.3927)では「大唐大中十一年」の「法成於沙州開元寺說畢記」の「講説」の「説」しか記さないが、これらも法成の講義を明照が聴講した時のものである。従つて、他の文献において単に「聴」しか記さなかつたり、「講」としか記さなかつたりしたものも、講義を聴講した時の聴講者か講説者かのそれぞれの一方の立場からだけ奥書に記したに過ぎないことが考えられる。
- (三)「點」「點勘」の「點」の内容は、句切点や声調符・合符等であつて、日本の訓点資料におけるヲコト点や仮名と異なることは当然である。

三、本邦の訓点資料において奥書に「聴・聞」「講・講師」の語を持つもの

——九世紀資料と十世紀南部資料——

敦煌文献の奥書で漢文の読解を反映した語について、本邦の訓点資料の奥書で漢文の読解を反映した語と比較すると、「読誦」「念誦・誦」のような「誦」に係る用語は見難いが、「聴」と「講」の用語が見られ、漢文訓読の初期資料に偏つて多用されていることが分る。「聴」に当るものを本邦では「聞」の文字でも表わし、「講」については「講師某」として、講説者の名を記すことも見られるが、漢文読解の行われる場として中国大陸におけるそれと共通する所があつたことを窺わせる。尚、「点」については、本邦の訓点資料では、やや後れて用いられていて、これについては次節において後述する。

以下に、本邦の訓点資料の奥書で、「聴・聞」「講・講師」の語を用いたものを掲げる(△印は本奥書によつたもの)。

奥書より觀た院政期の天台宗訓読の特色

1、「聽・聞」と「講・講師」を共に記すもの

A群資料

○金剛般若經讚述 一卷 聖語藏

(奥書) (白書) 以嘉祥四年(八五二)四月廿八日於崇福寺聽了／講師元興寺

○金剛般若經讚述 一卷 東大寺圖書館藏

(奥書) (白書) 仁和元年(八八五)七月卅日聞了講師忠最

○大日經疏△ 二十卷 醍醐寺藏(大治五年(一一三〇)書写・加點本)

(卷第一奥書) (朱書) 自承和十三年四月廿五日始講廿八日了／

聽衆真雅大徳 真紹、 惠詮、 真無、 源仁、 宗叡、 惠等、 安覺、
惠峯、 真衆、 慶基、 春復、

B群資料

○成唯識論述記 一卷 知恩院藏

(奥書) (白書) 以延長六年(九二八)潤八月十日読了講師興福寺慈凝?
開者當寺沙門成澄?

○辯中辺論 一卷 聖語藏

(奥書) (白書) 以天曆八年(九五四)四月廿九日聞合了 講師興福寺僧都／空(晴)請僧都

○成唯識論述記△ 一卷 日光天海藏(元曆二年(一一八五)点本)

(卷第二末奥書) 點本奥云永祚二年(九九〇)候長講八月九日此卷聽了

講師明憲大徳 春秀聽了云、

○法華義疏 卷第一～卷第四・卷第五・卷第十一 六卷 石山寺藏

(卷第四奥書) (朱書) 長保四年(一〇〇二) 九月六日於藥師寺傳教院円堂点了

沙門注算了聴衆廿餘口也 / 講師專寺鏡超五師

2、[聴・聞]とのみ記すもの

A群資料

○華嚴經文義要決問答卷上 一卷 延曆寺藏

(奥書) 延曆十八年(七九九)^{次歲}己卯年正月八日書写近事

行福過去父母現在父母无邊法界四生衆生為行奉

(黃褐色) 「同年廿二年十月三日聞智圓」

○成実論 十一卷 聖語藏・東大寺図書館藏

(卷第十四奥書) (白書) 天長五年(八二八) 七月一日一往聴了

○金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王經卷第二、卷第三 二卷 石山寺藏

(卷第二奥書) (白書) 仁和二年(八八六) 九月二日聞已於元慶寺圓大師御口 / 以仰聴命

○百法顯幽抄△ 一卷 東大寺図書館藏(延喜(九〇一九二三)頃写)

(奥書) 巨唐會昌三年(八四三) 十月廿一日上都資聖寺写畢 惟正記

貞觀十四年(八七三) 三月廿五日聴聞畢 比丘令秀

伝法師前入唐求法惟正大和尚

(別巻) 「伝受比丘喜靜謹記」(以上本奥書)

B群資料

○辯中辺論卷上・卷中・卷下 三帖 石山寺藏

奥書より観た院政期の天台宗訓説の特色

(卷上奥書) (白書) 此卷延長八年(九三〇)七月十九日聞了/清書本為耳

○略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門 一卷 石山寺藏(薰聖教)

(奥書) (朱書) 以去延喜九年(九〇九)八月十六日聞此經 於故高野座主峯禪和尚已了今更写一本而令分明案/

此經甚深微妙之理耳于時天慶六年(九四三)五月十三日也

○大毗盧遮那成佛經疏 十九帖 東京大学国語研究室藏

(奥書) (卷第七) 治安四季(一〇二四)四月八日聽了 僧ふん經念本

(卷第十) 長元七年(一〇三四)甲戌十月十九日点了(花押)

(卷第二十) 長治二年(一一〇五)自四月一日至七月廿二日奉誦交已了/於小田原迎接房 僧隆賀

3、[講・講師]をのみ記すもの

A群資料

○大乘掌珍論 一卷 根津美術館藏

(奥書) (白書) 承和元年(八三四)七月廿八日於岡基誦了

(別筆) 「嘉祥二年(八四九)八月十五日一度勘了」

同年九月五日葉師寺西院講]

○大智度論 二十三卷以上 石山寺他藏

(奥書) 天安二年(八五八)山階寺伝大詮大徳所講

天安二年山階寺伝書/興福寺□□□□

○蘇悉地羯羅經略疏卷第二、卷第七△ 二卷 京都大学藏

(卷第二奥書) (朱書) 寛年八年(八九六)歲次丙辰夏三月謹依(六) 伝法阿闍梨仰与/基安禪師始尋首尾今日功畢然大師早創

下筆以後／雖累多年未有講受之者始於今日伝受之後代／學者宜悉之耳六月廿一日捺持院僧憐昭記

○成唯識論述記第四△ 一卷 知恩院藏（延長六年（九二八）点本。奥書は別本のものかとされる）

（奥書）自延曆五年（七八六）十一月七日始講唯識論基師

○因明入正理論義纂要△ 一卷 興福寺藏（正治二年（一一〇〇）写本）

（奥書）点本奥記云元興寺明詮天長八年（八三二）略勘了 九年三月廿六日講 興福寺僧定寂以／安和三年（九七〇）歲次庚午

二月己晦日尋借明詮僧都点本書云、

○春秋經伝集解△ 三十卷 書陵部藏（文永六年（一一六九）等写本）

（卷第二十五奥書）件書奥云凡直根繼／以天長九年（八三二）七月九日講読畢苅田直講／尊尚復件塞用墨点也

B群資料

○大乘掌珍論 一卷 小川雅人氏藏

（奥書）（白書）天曆九年（九五五）三月四日念佛院講論了 講師觀理已講

以上の訓点資料の奥書を通して見るに、読解し訓点を施すことが講師の講説を聴聞する場で行われたことが知られる。2のように単に「聴」「聞」とのみ記したのも、又、3のように「講」「講師某」をのみ記したのも、敦煌文献の場合と同様に講説を聴講した時の聴講者か講説者かの一方のことだけを記したに過ぎないことが考えられる。

それを1、2、3それぞれにA群資料とB群資料とに分けて示したが、A群資料は平安初期九世紀の年紀を持つ訓点資料であり、B群資料は続く平安中期十世紀の年紀を持つ訓点資料である。但し平安中期十世紀の訓点資料は南都系の寺院に係るものに偏っている。これに対して平安初期九世紀の訓点資料は、元興寺・東大寺・薬師寺西院・興福寺のように南都の諸寺に係るものが多いが、天台宗の延暦寺関係のもの（華嚴経文義要決問答卷上の延暦十八年における知圓の「聞」、金剛頂一切如来真实撰大乘現證大教王経の仁和二年に元慶寺において「聞已」や真言宗関係のもの（大日経疏を承和十

奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色

三年に講じたのは空海の弟子の実恵と見られる⁽¹¹⁾のよう(11)に平安新興仏教にも見られ、俗家の大学寮でも当然のことであるが行われていたことは、天長九年(八三二)に春秋経伝集解を直講の苅田根継(種継)⁽¹²⁾が「講読」したという本奥書から窺われる。(12)

平安初期九世紀の訓点資料で奥書に九世紀の年紀を持つものは、本奥書の七点を含めて二十八点が知られる。このうち「聴・聞」「講・講師」の語を記したものが十三点ある。書写や校勘だけ、又は単に年月日・僧名だけを記したものは十一点を除くと、読解に係る語としては、他に次の四点がある。

「見」

○因明入正理論疏△ 九帖 興福寺(建武二年(一三二五)写本)

(卷第十奥書)写本云／導本奥云以天長六年十二月略見竟予二年(永久)／春欲披疏文鳩集衆本幸得明詮自筆導／本(下略)

○百論 一卷 大東急記念文庫蔵

(奥書)(白書)天安二年(八五八)正月五日見了矣

この「見竟」「見了」も、訓読の講説を前提としたものと考えられる。前者の因明入正理論疏は、天長六年の明詮の奥書を伝えたものである。明詮は前掲のように、因明入正理論義纂要を天長九年に「講」じているが、その前年に「略勘了」している。この「勘」も読解に係る語である。⁽¹³⁾又、根津美術館蔵の大乗掌珍論では、前掲のように、嘉祥二年九月に薬師寺西院で「講」じたが、その前月の八月に「一度勘了」している。更に十五年前の承和元年(八三四)には岡基で「読了」している。円珍が在唐中に、金光明経文句を「勘過」したり、釈観無量寿経記を「勘過」「点過」「看過」したりしたのに徴すると、「見竟」「見了」も、単に眺めたのではなく、読解したことを反映する語と考えられるのである。

「勘着科文・勘着科点」

○大方広佛華嚴経 二十二卷以上 大東急記念文庫・他蔵

(卷第三十二奥書) 貞觀十九年(八七七)三月十一日新写此卷補舊經所闕即一捺了/延曆寺沙門儀遠

(宋書) 元慶三年(八七九)二月廿九日依法藏師疏勘着科文了

(卷第三十八奥書) (宋書) 元慶三年秋七月十四日勘着科点略了

「科文」「科点」とは科段(段落)を示す符号や点を意味し、既に敦煌文献に多用されていることは先掲の通りであり、円珍が在唐中に求得して将来した大小乘経律論疏の目録の中にも「科点」とあり、「楞伽阿跋多羅宝经四卷」では、宗本大徳が疏によって自ら科点を施した本を、他の五本と一緒に円珍に捨与(施し与えた)したことが分る。従つて、大方広佛華嚴経に延曆寺の儀遠が使つた「科点」の語は、中国大陸で用いられていたものを、円珍などの入唐僧が字び持ち帰つた可能性が大きい。

〔伝受〕

○金剛頂蓮華部心念誦儀軌 一卷 石山寺藏

(見返) (宋書) 寛平元年(八八九)十一月廿七日伝受了 积□□之

寛平(八八九―八九八)は九世紀末に当り、寛平八年の延曆寺僧憐昭の奥書を持つ蘇悉地羯羅経略疏(先掲)と共に「伝受」の語が用いられている。この語は、次節に説くように十世紀以降に多く見られるようになる訓読用語であつて、寛平年間の使用はその走りと見られる。

以上見た所によると、平安初期九世紀の訓点資料は、奥書に記された読解に係る用語から観ると、殆どが講師の講説を聴聞する場において成つていたものであることが知られる。但し、平安期末の寛平年間には天台宗僧の間で新しい「伝受」が行われ、又、入唐僧の影響により天台宗僧が「科点」を施すことも行われている。

「科点」が中国大陸の読解方法の影響であつたとすれば、平安初期に一般的であつた「講師の講」を「聴・聞」することとも、敦煌文献に通ずるので、中国大陸の影響であつた可能性がある。それを奥書の比較だけでは証することは出来ない

いが、平安初頭期でヲコト点や省画面体という本邦独自の訓点が無発達の時期には、例えば延暦寺藏華嚴經文義要決問答卷上の延暦十八年(七九九)写本に、智圖が延暦二十一年に「聞」したという奥書を持つ訓点資料において、この奥書を書いたと同じ黄褐色で本文に句切点だけを施しているのは、正に敦煌文献の加點本のそれに通ずる⁽¹⁵⁾。この本文の加點状況とその読解を示す奥書とを併せて考えると、本邦の読解方法が中国大陸の直接の影響に始まった可能性は更に大きくなる。さすれば、平安初期の訓点資料の奥書に見られる「聴・聞」と「講・講師」の語は、中国大陸の用語を取入れたものであり、その背景に大陸の読解方法があり、その加點から始まったという当時の漢文学習の方式を反映するものと考えられる。

平安初期の読解方式は、平安中期十世紀にも、B群資料が示すように、興福寺・薬師寺・東大寺など南都では引続き承け伝えられている⁽¹⁶⁾。「見」も平安中期に見られるが、

○実相般若波羅蜜經 一卷 五島美術館藏(第三群点)

(奥書) (自書) 承平五年(九三五) 六月十八日見了僧(草名、「浄」?)

これもヲコト点から見て南都僧のものである⁽¹⁷⁾。

四、本邦の訓点資料において奥書に「伝受」並びに「点」「読」の語を持つもの

——十世紀以降の天台宗・真言宗資料——

「伝受」の語が平安初期末寛平年間(八七三)の天台宗の訓点資料に見始められることを前節で述べたが、他にも、前掲の百法頭幽抄(東大寺図書館藏)の貞観十四年(八七三)の本奥書とは別筆の墨書に、「伝受比丘喜靜謹記」とある。この本は平安中期初の延喜(九〇一—九二二)頃の写本と見られ、円珍の弟子の惟正が在唐中、會昌三年(八四三)に書写した本を、惟正の弟子の令秀が聴聞したという本奥書があるからやはり天台宗の訓点資料である。

以下に「伝受」の語を持つものを挙げる。

〔伝受〕

○大聖妙吉祥菩薩説除災教令法輪 一帖 石山寺蔵（叡山点）

（見返）（白書）天曆四年（九五〇）六月廿六^{（下）} 始誦之大師即伝受之／（墨）禅林

○金剛頂蓮華部心念誦儀軌 一卷 東寺金剛蔵（第五群点）

（奥書）（黄朱書）大平興国九年（九八四）八月十八日受法了

（白書）「法詮尔宗叡僧正請文」

（後筆、墨書）「大平興国七年嵩獄会善寺瑠璃戒壇／院礼闍梨大師 處伝受僧守堯記／

同九年二月四日此本伝受同四日授了」

○大毗盧遮那成佛經^{卷第一}△ 一卷 醍醐寺蔵（西墓点）

（奥書）（朱書）点本云／正曆三年（九九二）歲次九月廿一日於天台千手院実相房点／^{（處）}广祚阿闍梨／為令法久住被伝受之／

ム之記

○大毗盧遮那成佛經広大成就儀軌^{卷上、卷下} 二卷 青蓮院吉水蔵（宝幢院点）

（奥書）（朱書）始長和三年（二〇一四）八月十八日至于廿日三箇日之間奉誦畢／伝授師飯室律師御房^{（尋巴）} 僧明快年卅藹十七

受之

○仏説六字神呪經（版） 一卷 石山寺蔵（墨点是西墓点）

（紙背）（朱書）天喜元年（二〇五三）八月九日於中之間切句了「以伝授者之本」^{（墨消）} 御倉町未申角ニシ／テ写之僧円（以

下欠）

○蘇悉地羯羅供養法上・下 二帖 高山寺蔵（第五群点）

奥書より觀た院政期の天台宗訓読の特色

コト点が加點されている。長和三年（一〇一四）八月に三日間、飯室律師尋円(20)から明快が「伝授」されて「奉読」している。共に延曆寺の僧である。

「読」は「点」と共に「読点」としても用いられる。

○大日経広大成就儀軌 一帖 東寺金剛藏(叡山点)⁽²¹⁾

（奥書）永延三年（九八九）己三月十八日読点己了／僧（草名「仁孝」）カ 本

「読」も「点」と同種の内容を指すものと考えられる。

この「点」「読」も、「伝受」と同じく、訓点としては平安中期十世紀から見られるものである。

訓点の奥書として「点」という用語を用いた現存最古の点本は、中田祝夫博士の指摘された石山寺藏(22)の蘇悉地羯羅供

養法（順暁和尚加點）である。即ち、

（卷上）（白書）延長三年潤十二月廿四日点了／祐

（卷下）（白書）延長三年潤十二月廿五日点了

とあり、延長三年（九二五）に石山寺の淳祐内供が自ら白書でヲコト点の順暁和尚点と仮名とを以て訓点を施し、その白書で右の奥書を記して「点了」としている。

以下、次の点本の奥書に「点」の語が用いられている。

○大毗盧遮那経随儀軌 一帖 高野山宝寿院藏（仁都波迎点）

（奥書）天曆二年（九四八）二月七日書得己了

（白書）「同二月十一日点了」

（内表紙左下に「台釈常憲之本」とある）

○漢書楊雄伝 一卷 上野淳一氏藏（第五群点）

奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色

(奥書) 天曆二年(九四八)五月廿一日点|了藤原良佐

○成唯識論卷第三、卷第五 二卷 大東急記念文庫・桂泰藏氏藏(中院僧正点)

(卷第五奥書) 模写明詮僧都之道本_{(永安和元年(九六八)十月十六日点|此卷了興福寺沙門真興}

○仁王護国般若波羅蜜經卷上、卷下 二卷 南法華寺(中院僧正点)

(卷上奥書) (朱書) 永祚二年(九九〇) 庚寅五月廿五日於勸覺寺勘良實疏点|了 興福寺積真興

○甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌△ 一帖 東寺金剛藏(西墓点、永久二年(一一一四)写本)

(奥書) 点本云点本云康平四一(二〇六二)四一八日奉読|了

以平等院本一交了校本云長保五年(二〇〇三)六月

十六日於三井寺小堂奉隨大阿闍梨点|了

○金剛頂瑜伽降三世成就極深密門△ 一帖 東寺金剛藏(西墓点、永久二年(一一一四)写本)

(奥書) 点本云点本云御本云/長保六年(二〇〇四)二月十五日辰時奉隨大阿闍梨承点|了 于時於三井寺時永堂記之/

僧正□

○阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌 一卷 東寺金剛藏(西墓点)

(奥書) (朱書) 「寬弘五年(二〇〇八)三月十八日三井寺於龍雲房奉点|之/僧永圓記之」

同年月日以新写点本献平等院賜此本也 以此本狼藉新本頗/整正故也 大阿闍梨曰此為汝親/点得故記/寬

仁二年(二〇一八)十一月廿二日追記三井寺沙門行円

○蘇悉地羯羅經卷上、卷中、卷下 三卷 高野山学園藏(第五群点・喜多院点)

(卷下奥書) (朱書) 寬弘五年(二〇〇八)四月十八日読|了南御室御伝法

(卷上奥書) (橙色書) 治安三年(二〇二三)四月十二日点|了 求法沙門(草名)

以下、十一世紀から十二世紀の点本の奥書にも多く見られる。「点」を用いた者は、十世紀と十一世紀初には、石山寺真言宗の淳祐、ヲコト点から見て天台宗延暦寺僧、天台宗三井寺の慶祚大阿闍梨、大学頭藤原在衡にゆかりの藤原良佐⁽²³⁾であり、平安新興仏教の真言宗と天台宗の僧及び俗家が多い。南都では興福寺の真興が用いているが、真興は法相宗を研学する一方で、真言宗の流を仁賀から受けて子島流の祖となっているからその影響が考えられる。ヲコト点に用いた中院僧正点は、真言宗の明算に伝えられ、その資の間で使われた点法である。

次に、「読」の用語は、右掲の奥書の中にも「点」と同じ文脈で使われているが、十世紀の点本に次のように見られる。

○蘇悉地羯羅經卷上 一卷 京都大学附属図書館蔵(西墓点)
(奥書) 白書 延喜九年(九〇九)八月廿二三日読了 空恵記

○成唯識論述記⁽²⁴⁾卷第四 一卷 知恩院蔵(第二群点)
(奥書) 白書 延長六年(九二八)潤八月十日読了⁽²⁵⁾
講師興福寺慈凝^(?)
聞者當寺沙門成澄^(?)

○熾盛光讚 一通 来迎院如来蔵(仮名点)

(奥書) 以康保四年(九六七)十月十二日奉読法性寺座主之

○大毗盧遮那經普通真言成就瑜伽卷上 卷下△ 二卷 東寺金剛蔵(淨光房点、天永四年(一一一三)写本)

(卷下奥書) 写本記云、貞元二年(九七七)六月廿一日辛亥日読了 慶公御伝也／同学人々／十五宮明観公 香隆寺僧

正御弟子仁衡上人／西寺僧正御弟子一道上人 未坐僧鎮応已上／四人瑩玉承畢了

この使用者は、天台宗の三井寺僧と延暦寺僧であるが、南都でも成唯識論述記卷第四に「読了」と用いている。但し、そこでは「講師興福寺慈凝^(?)」の講読を「當寺沙門成澄^(?)」が「聞」くという平安初期以来の伝統的な用語と共に用いている。ヲコト点を加点していることからすれば、この聴聞の時の「読」とは訓点を施す内容であったと見られる。

「読」の用語は、十一世紀以降も訓点本の奥書に引続き用いられている。

「十一世紀における南都の「点」の使用」

「読」は右掲のように南都でも十世紀に「講師」「聞者」と共に用いられた例があるが、「点」の語は南都では、真興が真言宗の影響で使った場合を除くと、一般には平安後期十一世紀から見られるようになる。次のようである。

○法華義疏卷第一卷第四、卷第五、卷第十一 六卷 石山寺藏（第三群点）

（卷第四奥書）（朱書）長保四年（一〇〇二）九月六日於薬師寺伝教院円堂点了

沙門注算了聴衆廿餘口也／講師專寺鏡超五師

ここでも平安初期以来南都で用いた「聴」と「講師」の語も使われ、「点了」はそれと共に用いられている。

○成唯識論卷第十 一卷 興福寺藏（喜多院点）

（奥書）（朱書）治安三年（一〇二三）正月從廿日至于廿二日点此卷了 於中院之

（朱追筆）「治安三年歲次癸亥正月廿二日一部点了 始從去年十二月六日於中院点之／興福寺末学沙門蓮範生年廿六夏曆十一」

同一始自三月日至四月十三日依明詮僧都自筆導本写之

興福寺中院沙門蓮範

○不空羂索神呪心經 一卷 西大寺藏（喜多院点）

（奥書）（白書）寛徳二年（一〇四五）五月廿八日於南円堂点畢

○地藏十輪經卷第十 一帖 知恩院藏（喜多院点）

（奥書）（朱書）康平三年（一〇六〇）十一月七日点了／興福寺僧慶念願以此功德 普及於一切

○成唯識論述記卷第五末 一卷 知恩院藏（喜多院点）

（奥書）（朱書）康平四年（一〇六一）六月二日申时点了 興福寺住僧（墨消）「求法」（下略）／六月從一日至八日見了／法相大

乘宗

○大毗盧遮那成佛經 七卷 西大寺藏(喜多院点)

(卷第七奥書) (朱書) 承曆二年(一〇七八) 九月十六日移点了 於龍華樹院正覺房／夏秋二時此經一部奉点了／以所生功

徳 導六道衆生 令入阿字門 自他同證得／金剛弟子寛經

院政期十二世紀に降つても、南都では、「聴」「講師」の伝統的な用語を用いると共に、「点」も引き続き使われている。例えは次のようである。

○高僧伝卷第十三 一卷 興福寺藏(喜多院点)

(奥書) (朱書) 康和二年(一一〇〇) 八月十六日奉読了

講師智賢大法師 聴衆大法

○妙法蓮華經 六卷 立本寺藏(喜多院点)

(奥書) (卷第一、白書) 寛治元年(一〇八七) 丁卯 歲次 五月九日於興福寺上階馬道以西第六大房／移点了 本經亦穗珣照君点本也／

末学沙門経朝之

○大慈恩寺三藏法師伝卷第一 一卷 興福寺藏(喜多院点)

(奥書) 延久三年(一〇七一) 七月十三日書写 時西魁 初点也

(別墨) 「永久四年(一一一六) 二月六日移点畢」

「伝受」と「点」「読」とが同一点本の奥書の同一文脈にも用いられるのは、両者の間に密接な関係のあることを示している。「伝受」は訓点の授受の外面的な形式を表し、「点」「読」はその具体的な内容を表すものであろう。「伝受」の語が注記されるのは、現存する点本は多くが受者の加點本でありその立場から記したものである。しかし、中には「授者」の立場から記した次のようなものもある。

○金剛頂瑜伽修習毗盧遮那三摩地法 一卷 筑波大学藏(慈覚大師点)

奥書より觀た院政期の天台宗訓読の特色

(奥書) 延長八年(九三〇)五月廿八日圓堂三僧寬空大德講之

(朱書) 以天曆三年(九四九)六月十日授仁覺禪解補算等師了

(別墨書) 康保二年(九六五)正月廿四日授雅守法師了其間候東院

授けたのは、石山寺第四世座主の寬忠(九〇五—九七七)と見られる。寬忠は寬平法皇の皇孫であり、石山寺淳祐から天慶九年(九四六)に同部灌頂を受け、康保二年(九六五)に寬空から重ねて灌頂を受けた。この寬空は、元は東大寺法相宗、後に寬平法皇に灌頂を受け、南御室を受領して圓堂三僧阿闍梨となった⁽²⁵⁾。寬空が「講」を使ったのは東大寺と関係があるのに対して、寬忠が「授」けたのは天台宗延曆寺僧所用の慈覺大師点である。

一方、「点」の中にも「授者」乃至は「伝受」でない立場から用いたものもある。石山寺淳祐が蘇悉地羯羅供養法に延長三年に順曉和尚点を用いて「点了」したのはその例と見られる。又、興福寺の真興は、仁王護国般若波羅蜜經に中院僧正点を用いて「点了」しているが、それは唐の学僧良賁の撰述した注疏を参「勘」したものである。又、成唯識論では明證の導本の模写に基づいて「点了」している。

このような場合もあるが、「伝受」と「点」「読」の語が平安中期の天台宗そして真言宗の点本に一般的に見られるようになったのは何故であろうか。「科点」が敦煌文献に施されて中国大陆で既に使われたのに関連して、円珍が在唐中に求得して將來した聖教に「科点」の語があり、延曆寺儀遠が大方広佛華嚴經に「科点」を「勘着」したことは既述の通りである。

その円珍は在唐中の大中十二年(八五八)に台州開元寺で釈觀無量壽經を読む時に「点過」の語を用い⁽²⁶⁾、又、請來經の中に「科点」と共に「点」の注記があり、帰朝して三十年後の仁和四年(八八八)に著述した「大日經義釈批記」でも「同点」「朱汚点」「朱点」「点本」「堅慧内供点本」の語を用いている⁽²⁷⁾。敦煌文献には先述のように既に「点」の語が用いられているから、入唐した天台宗や真言宗の僧がこの語とその点本を修得したことは十分に考えられる。天台宗では、円

珍の弟子の空恵が延長三年（九二五）に書写させ自ら署名した青蓮院吉水藏『山王院藏書目録』でも「点」「点汚」「朱点」「点本」「加賀昌遠点」「丹後叔文和尚点本」の語が用いられている。⁽²⁸⁾ 円珍のような入唐僧が大陸で知得したものに拠っていると見られる。大陸における「点」の内容は、句切点のような符号であつて、本邦の訓点とは異なるが、この用語と句切点とを踏襲すると共に、本邦では独自にその上にヲト点や省画体を取入れて発達させたものであろう。

「伝授」の語も中国で使われたらしい。先掲の東寺金剛藏金剛頂蓮華部心念誦儀軌には、卷末に白書で「法詮^(金)宗叡僧正請文」と書かれ、黄朱書で「太平興国九年（九八四）八月十八日受法了」の識語がある。更に卷末補紙に別筆墨書で「太平興国七年高獄会善寺瑠璃戒壇／院礼闍梨大師 處伝受僧守堯記／同九年二月一日此本伝受同四日授了」とある。見返には宗叡（延曆寺座主義真に天台を学び入唐して法全に随つて重ねて准頂を受く）が法全から伝授され請来した本であると記している。卷末補紙は平安後期の筆であるから後改の惧れもあるが、中国の太平興国九年の用語とすれば、本邦の初出例である石山寺藏金剛頂蓮華部心念誦儀軌の寛平元年（八八九）点の「伝受」に通ずる。太平興国九年（九八四）は百年程降るが、黄朱書の識語は当時中国で書入れたものであり、この同じ黄朱色で卷末の陀羅尼文に科段点と句切点が施されている。更に陀羅尼の音を真仮名等で注音もしている。これは、中国大陸において陀羅尼を、本邦の留学僧が、科段や句切の「点」と注音とを施して「受法」（伝受）することが行われたことを具体的に示している。石山寺藏の寛平元年点が同じく陀羅尼の加点点であり、しかも同じ金剛頂蓮華部心念誦儀軌であるのは偶然ではないと思われる。

こうして見ると、中国大陸における学習方式の「点」と「伝受」とが、その用語ともどもに、留学の天台僧によつて、おそくとも仁和・寛平の頃には将来されて、天台宗の僧の間に行われた可能性がある。とすれば、「伝受」と「点」（読）とが、平安中期に天台宗の点本から見られ始め、平安初期の南都僧の点本に見られなかったのは偶然ではないのであり、読解の方式が基本的に異なつたことを意味する。

五、同一の訓点資料に異種の訓読の併存を示す用語のあるもの

——十一世紀の天台宗・真言宗資料——

平安後期十一世紀には、南都古宗でも「点」の用語を一般的に用いるようになるが、天台宗や真言宗では新たに、同一の点本の奥書に二種又はそれ以上の異種の訓読文が併存したことを示す用語が見られるようになる。その最も早いものは管見では、三井寺の文慶（九六七—一〇四六）が、長保六年（一〇〇四）に三井大阿闍梨慶祚から受学した金剛頂蓮華部心念誦儀軌である。その奥書は次のようである。

（文慶後筆）長保六年三月十八九廿廿一并四ヶ日之間受学三井大阿闍梨已了志同前耳 老僧文慶（慶祚）年卅八（八）臘廿五（墨点是也）

同点観音院十禅師定暹公之（追筆）「已上後受」

この点本には、別に文慶が十七年前の二十一歳の永延元年（九八七）に、天台山百光房で、入道三宮の皇蘭寺倫誉（京意の資）から奉受した時の識語が次のようである。本文はこの永延元年の書写である。（29）

永延元年七月廿一日廿三日二箇日之間奉受入道三宮／志偏在出離生死頓證菩提耳於天台山百光房奉受之（本「師云皇蘭寺説云、」）

沙門文慶（追筆）八年廿一「前受」

この永延元年に奉受した時の訓点は、本文に朱点で施されている。これに対して、十七年後の長保六年に慶祚から受学した訓読は本文に墨点で施されていて、長保六年の後筆識語に文慶が「墨点是也」と注記したのに合う。長保六年の墨点は、永延元年に最初に奉受して全文に加点した朱点に対して、主に異なる訓読を示しているもので、両者の訓法には著しい差異が認められるもの（30）の、両説は共に活きている。現に、文慶はこの識語に追筆（恐らく、長保六年の時）して、永延二年の倫誉から奉受した訓読を「前受」と記し、長保六年の慶祚から受学した訓読を「後受」と記している。

平安初期や平安中期の白点本の中には、同一点本に同じ白点で別種の訓読を書入れたたり、平安後期以降に朱点等を書

入れたりしたものもあるが、その場合には平安初期や平安中期の初点の白点を無視するものであった。これに対して、文慶が同じ経巻に時を隔てて二種の識語を併記し、訓読も朱・墨で異説として併存させているのは、二種の全巻に亘る訓読文を共に尊ぶべきものとして意図的に書き留めたことを示している。これは、平安初期や平安中期には見られなかった新しい方式の起つたことを意味する。その異種の訓読文が共に尊ばれて、伝承されるようになると、訓読文の固定化を必然的に生み出すことになる。現に、この経巻と訓点とは、長元七年（一〇三四）に文慶の弟子の成尋が、法印御房（文慶）から稟受し、重ねて入道三宮倫誉と唐房阿闍梨行円から伝受したことが後表紙見返に濃紅色で朱書された、

長元七年八月廿五日奉随法印御房稟受畢

重奉随入道三宮稟受畢

又重奉随唐房阿闍梨稟受畢／成尋

の成尋の識語から知られる。更に、延久二年（一〇七〇）には、成尋の弟子の隆覚が伝受して訓んでいることが、同本に朱筆で追筆された、

始自延久二年九月十七日至于十一月七日奉随阿闍梨□□／読事畢 僧隆覚

同点法林房但墨点定也

の隆覚の識語から知られる。

平安後期十一世紀の天台宗や真言宗の点本では、このように、同一の点本の奥書に二種又はそれ以上の異種の訓読文が併存したことを示すものが一般的に見られる。そのことを示す語句や表記に注目して見ると、次の三つの型が得られる。

同一の点本に、加点头・加点头者の異なる二種（又はそれ以上）の識語が併記されて、二種目は追筆又は後筆で書加えられることが多い。本文にはそれぞれに対応する異なった訓法が併記され、異説として共に授受されている。その場合

に、次の型がある。

a、同一の点本に併記された二種（又はそれ以上）の相異なる識語が、墨書と朱書（或いは橙色や時に白書等）で色分けされて記される。本文の訓読もそれに対応して墨書と朱書等で区別される。

b、識語の中に「墨点」や「朱点」の用語を記して、二種の点を色分けで区別したことを示す。

c、識語の中に「点重」「重奉読」の「重」の用語を用いる。

この a、b、c、の三つの型は、単独で記されるだけでなく、同一の点本の識語において、二つ以上の型に亘って記される場合もある。

以下三つの型の若干の例を型ごとに挙げる。

a、同一の点本に併記された二種（又はそれ以上）の相異なる識語が、墨書と朱書等で色分けされて記される。

○金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王経卷上、卷中、卷下 三卷 高山寺藏

（奥書）（卷上、白書） 寛弘五年（一〇〇八）三月廿四日於仁和寺南御室点始同五日点了 / 高尾法（奥） 闍梨奉受了 （卷） 「叡

算之」

（卷下、別朱書）「長元八年（一〇三五）十一月十六日於田野御房点了伝授師僧都御房也」

寛弘五年に仁和寺南御室において、叡算なる僧が高尾法照闍梨から奉受し点（西墓点）を施したことを白書で記している。これに、二十七年後の長元八年に田野御房において、僧都御房（成典か延尋か深観かという）から伝受し加点（第五群点で円堂点に近いが少異がある）したことを朱書で記している。本文にはこの白点と朱点とが施されている。

○蘇悉地羯羅経卷上、卷中、卷下 三卷 高野山学園藏

（奥書）（卷下、朱書） 寛弘五年（一〇〇八）四月十八日読了南御室御伝法

（卷上、橙色書）「治安二年（一〇二三）四月十二日点了 求法沙門（草名）」

(巻下、白書) 「承保元年(一〇七四)十一月廿八日於高野山中院明算／山籠奉受了 寛智」

(巻下、鮮朱書) 「天仁元年(一一〇八)十二月十五日於華藏院律師伝受了／沙門聖恵」

寛弘五年の南御室御伝法による読了を朱書で記したのに対して、治安三年の点(喜多院点)の書加えを橙色、承保元年に寛智が明算より奉受した点(円堂点)は白書で記している。尚、院政期にも加点が行われて天仁元年に聖恵が華藏院律師より伝受した点(円堂点)とその識語は鮮朱色で記して、それぞれ区別している。

○施餓鬼法 一帖 青蓮院吉水藏

(奥書) (墨書) 長暦元年(一〇三七)六月廿二日於江文堂奉読丹波阿闍／梨已了 求法沙門慶意

(朱書) 「延久六年(一〇七四)正月廿六日受了於谷也 僧良祐／廿七日移点了五如来已下／梵本点本无之」

長暦元年に慶意が江文堂において丹波阿闍梨(皇慶の弟子信譽⁽³²⁾)から奉読した識語を墨書で記し、本文にはその墨仮名がある。これに対して、三十七年後の延久六年に三昧阿闍梨良祐(皇慶の弟子)が谷において受け移点した時の識語は朱書で記し、その朱書で本文に訓点(仁都波迦点)が施されている。

b、識語の中に「墨点」や「朱点」の用語を記して、二種の点を色分けて区別したことを示す。

○大毗盧遮那成佛経広大成就儀軌^{巻上} 巻下 二巻 青蓮院吉水藏

(奥書) (朱書) 始長和三年(一〇一四)八月十八日至于廿日三箇日之間奉読畢／伝授師飯室律師御房 僧明快年卅歳十七

受之

(別墨書) 「治安二年(一〇三二)二月十一日從横川法橋復審奉読畢 墨点畢」

長和三年に梨本和尚明快(皇慶の弟子)が飯室律師尋円から伝受した識語を朱書で記したのに対して、八年後の治安二年に横川法橋復審から奉読した訓読を墨書(本文墨書とは別の後筆)の識語で加えて「墨点畢」と記す。本文のヲコト点は共に宝幢院点であるが、長和三年の点が朱点であるのに対して、治安二年の点は奥書に記すように墨点である。

奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色

○無量寿如来修観行供養儀軌 一帖 大東急記念文庫蔵

(奥書) 康元二(一〇五九) 四月十六日酉刻奉書写畢

(別墨書) 「康平七年九月廿三日奉読^{墨也}立印了／僧勝尋本／奉読立印了^{谷房}」

本文には朱書の訓点と墨書の訓点がある。共に仁都波迦点であるが、墨点は康平七年の勝尋の「奉読^{墨也}」に対応する。朱点と区別したものである。

○金剛頂瑜伽降三世成就極深密門 一帖 石山寺蔵

(奥書) 治暦元年(一〇六五) 十二月一日於西塔西谷善覚房書了／仏子圓快 「即時一交了」

(朱書) 「即日点了」

(別墨書) 「墨読大興房之」

善覚房、圓快ともに相実の流で、本文の朱点(宝幢院点)が朱書の「即日点了」に当る。墨点はこれを加補して別墨書識語の「墨読大興房之」に当る。

○无量寿如来修観行儀軌 一卷⁽³³⁾

(奥書) 延久三年(一〇七二) 二月廿六日於禅林寺别当闍梨奉受了 朱点是也

重奉^(受カ)交僧都御房了 墨読是^(マダ)

禅林寺において别当阿闍梨から奉受した点を「朱点是也」と記し、僧都御房から重ねて奉受した点を「墨読是^(マダ)」と記している。

c、識語の中に「点重」「重奉読」の「重」の用語を用いる。

成尋が文慶から稟受した金剛頂蓮華部心念誦儀軌の大東急記念文庫蔵本の後表紙見返に「重奉随入道三宮稟受畢」「又重奉随唐房阿闍梨稟受畢／成尋」という成尋自筆の識語に「重」の用いられていることは先に述べた所である。平安後

期には、この「重」も屢々用いられるようになってゐる。

○大日経広大成就儀軌 一帖 東寺金剛藏

(奥書) (朱書) 永延三年(九八九) 己三月十八日誦点已了/僧(草名、「仁孝」カ)本

(白書) 「寛弘四年(二〇〇七) 丁八月廿一日点重/僧仁本」

永延三年に僧仁(孝カ)が「誦点已了」した本に、十八年後の寛弘四年に同僧が重ねて点を施している。この寛弘四年の白書と同じ白点(叡山点)が本文に施されている。永延三年の点が誰の訓読であるのか、「点重」した寛弘四年の点が誰の訓読であるのか識語からは知ることが出来ないが、色分けによつて両説を併存させる意図が分る。

○金剛頂蓮華部心念誦儀軌 一卷 青蓮院吉水藏

(奥書) (墨書) 始長和五年□□(二〇一六) 六月一日至十四日於鎌藏延殷供奉誦了

(朱書) 「以治安元年(二〇二二) 十二月十八日於横川禅定房覚超/法橋重奉誦了」

長和五年から五年後に横川禅定房において覚超法橋から「重」ねて奉誦した識語は朱書で記されている。ヲコト点は宝幢院点。

○金剛頂蓮華部心念誦儀軌 一帖 東寺金剛藏

(奥書) 為无上并梵本移之已了了又

長久三年(一〇四二) 七月廿八日於大原持明房奉誦了独也

同年九月廿日重奉受之了同学香寂房懷宮供奉

(追筆一) 「又重受之同学 大慈房君義命」

(追筆二) 「又重奉受之同学実相房阿闍梨信惠 四度奉了之

金剛佛子勝成為无上并盡功也」

奥書より觀た院政期の天台宗訓読の特色

金剛佛子勝成が、長久三年七月に延暦寺の大原持明房で奉読した時は「独り」であったが、同年九月に「重」ねて奉受した時は、同学の香寂房懷宮供奉と一緒にであった。更に、同学の大慈房君義命と「又重受」し、同学実相房阿闍梨信恵と「又重奉受」し、併せて四度に亘つて奉受している。ヲコト点は宝幢院点。

○聖無動尊大威怒王念誦儀軌 一帖 高山寺藏

(奥書) (墨書) 永承六年(一〇五二)二月二日随常林御房受之了

(朱書) 「始自天喜二年(一〇五四)八月十六日至十八日／奉随実相房重受了」

永承六年に常林御房から受けた墨書に対して、三年後の天喜二年に実相房(天台宗園城寺の頼豪)から「重」ねて受けた時の識語は朱書で記している。本文には墨点に対してこの朱書の点(西墓点)がある。

○蘇磨呼童子経卷上、卷下 二卷 青蓮院吉水藏

(奥書) (卷上、朱書) 治暦四年(一〇六八)戊申五月十一日以海上点本智光房阿闍梨御伝、重重以移点了

治暦四年に海上点本に智光房阿闍梨御伝を処々に「重」ねて移点したと記す。ヲコト点は宝幢院点。

重ねて訓読する場合、同一の師から伝受する時は同じ訓読か少異のある程度であろうが、異なった師から伝受する時は異なる訓読になったであろう。識語に対応して訓点が色分けされている場合はそのことが明らかである。

平安後期の天台宗と真言宗の点本に見られた異種の訓読を奥書に併記することは、院政期にも引続いて行われている。先掲の、高野山学園藏の蘇悉地羯羅経の、天仁元年(一一〇八)に聖恵が鮮朱色で書加えた識語とその訓点(円堂点)はその一例である。

○北斗儀軌 一帖 青蓮院吉水藏

(奥書) (墨書) 長和二年(一〇一三)丑四月八日巳於長尾山書之睿超

(別墨書) 「永久二年(一一一四)九月十四日奉受三昧阿闍梨了／良実 如師本点了墨点是也／朱点古也於叶師本

之所者不写□^(也カ)／自□所以墨写也」

(以下、建保四年(一一二六)の道覚奉受の追筆と寛喜二年(一一三〇)の追筆あり)

長和二年の睿超の写本に対して、院政期の永久二年に良実が師の良祐から奉受して加点するがそれは「墨点」で行い、古い点の「朱点」と区別している。本文にはこの朱点と永久二年の墨点とが施されている。ヲコト点は宝幢院点。

○建立曼荼羅護摩儀軌 一帖 青蓮院吉水藏

(奥書) 承暦三年(二〇七九)十一月八日書写了

(朱書) 「承暦三年十一月十三日於井房伝受了 僧勝豪

承暦三年十一月十一日点了」

(別墨書) 「嘉保二年(二〇九五)十一月十六日於西京御房重伝受了／□受了円性」

(以下、建保五年(一一二七)の道覚奉受の追筆と道玄の伝受畢の追筆がある)

承暦三年の写本に勝豪が皇慶の資の井房安慶から伝受する時に朱点(仁都波迦点)を施した。その本に、院政期の嘉保二年に円性が西京御房において「重」ねて伝授した所を書加えているが、嘉保二年の点は墨書の仮名で区別している。

このように、平安後期の書写・加点本に対して、院政期(又は鎌倉時代にも)に追記して異種の訓読を色分けして示したり、「重伝受」したりしたことを示す奥書は天台宗を中心に他にも多い。

その中には、次のように院政期にそれぞれの伝領者がそれぞれの師から次々に伝受したことを次々に追筆して加えたものもある。

○聖無動尊大威怒王念誦儀軌 一帖 青蓮院吉水藏(仁都波迦点)

(奥書)(墨書) 永保元年(二〇八二)十月八日為求法者書之了

(朱書) 「永保二年五月廿九日以井房根本、点了勝豪」

奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色

〔宋追筆〕「同三年三月廿八日於谷房奉読了勝豪 一校畢」

〔別墨書1〕「永久四一（一一一六）七月十一日奉隨三昧阿闍梨伝受了／良実」
（良祐）

〔別墨書2〕「元永元一（一一一八）五月十八日以円陽房本粗移点了墨点也」

〔別墨書3〕「大治二一（一一二七）七月廿三日於二条房從円陽房重伝受了／伝受了円性」
（マツ）

（以下、建保四年（一一二六）の道覚奉受の追筆、建長五年（一一五三）の道玄奉受の追筆と尊純の伝領記がある）
勝豪は皇慶の資、良実は安慶の資の良祐から受学し、円陽房陽宴も皇慶の流である。

六、訓点資料の奥書に「本云」「本奥云」「点本云」等の本奥書云々の用語を持つもの

——十二世紀の天台宗資料——

右の皇慶の流の相承を平安後期の書写加點本の中に、院政期に次々と追記した點本を親本として、院政期の時点で移写移点して元の奥書を忠実に写すとすれば、移写移点の時点と区別する為には、元の奥書に「本云」「本奥云」「点本云」等の用語を冠せることが必要となってくる。この用語が院政期に一般的に用いられるようになる。

東寺金剛蔵の大毗盧遮那経普通真言蔵成就瑜伽卷上、卷下の二卷は、院政期の天永四年（一一一三）に宗範（仁和寺成就院寛助の資）が書写し移点したものであることが、奥書で知られる。

（卷下、墨書）天永四年潤三月廿一日於冷泉院御壇所奉写了

（卷上、朱書）天永四年潤四月十日庚申於冷泉院移点畢 大法師宗範之本／同十六日奉受畢

卷下にも同種の移点を示す朱書があり、それに次いで次の本奥書がある。

写本記云／貞元二年（九七七）六月廿一日辛亥日読了慶公御伝也／同学人々／十五宮明観公 香隆寺僧正弟子仁衡上

人／西寺僧正御弟子一道上人 未坐僧鎮応已上／四人瑩玉承畢了

三井寺の慶祚の御伝を訓点として伝えていることを「写本記云」として記している。
 以下に、院政期の書写加點本において、平安後期以前の年紀を持つ本奥書のあるものを、本奥書の年次順に配列して
 表覧する。

本奥書の用語	本奥書 (年紀)	の内容 (授者又は受者等)	(備考)	書名(所蔵)	書写加點年
写本記云	貞元二年(九七七)読了	慶公御伝也	同学四人承了	大毗盧遮那経普 通真言蔵成就瑜 伽(東寺金剛蔵)	天永四年 (一一一三) 書写移点
点本云	正曆三年(九九二)点・伝授	慶祚阿闍梨	於天台千手院 実相房	大毗盧遮那成佛 経卷第一 (醍醐寺蔵)	院政期書写
点本云点本云 校本奥曰	長保五年(一〇〇三)裏受	三井寺唐坊権大阿闍 梨座主(慶祚)		焰曼徳迦儀軌 (東寺金剛蔵)	永久二年 (一一一四) 書写
校本云	長保五年(一〇〇三)点了	随大阿闍梨(慶祚)	於三井寺小堂	甘露軍荼利菩薩 供養念誦成就儀 軌 (東寺金剛蔵)	永久二年 (一一一四) 書写・奉受
点本云点本云 御本云	長保六年(一〇〇四)承点了	奉随大阿闍梨(慶祚)	於三井寺時永 堂	金剛頂瑜伽降三 世成就極深密門 (東寺金剛蔵)	永久二年 (一一一四) 書写・受

件御本記云	寬仁二年(一〇一八)奉点已了	奉從大阿闍梨	於三井寺行円	金剛頂瑜伽文殊 師利菩薩供養儀 軌 (東寺金剛藏)	保延四年 (一一三八) 書写・受了 移点了
写本云	長元六年(一〇三三)点読之	沙門春禪本		胎藏略次第 (青蓮院吉水藏)	保安三年 (一一二二) 伝写
本云	長久四年(一〇四三)読点粗了	頼豪記	以美相房御本 加墨点了	佛説无量寿佛化 身大忿迅俱摩羅 金剛念誦瑜伽儀 軌法 (大東急記念文庫 藏)	保安三年 (一一二二) 書写校勘了
本云 本云	寬德二季(一〇四五)写了 長治元年(一一〇四)書写	以法橋御房(行円)本 以龍雲坊自点御本	頼寛写 於青蓮院書写	六字神呪王經 (広島大学藏)	仁平三年 (一一五三) 移点了
点本云	万寿三年(一一二六)稟受 寬德二年(一〇四五)点已	唐院法橋大阿闍梨座 下(行円) 对勘或本	頼尊記 頼尊記	金剛頂瑜伽蓮華 部心念誦儀軌 (石山寺藏)	天永三年 (一一二二) 書写移点了
大原本云	永承元年(一〇四六)奉受		長宴	大毗盧遮那成佛 經疏(築島裕・北 海道大学藏)	保延四年 (一一三八) 移点了

本云	天喜元年(一〇五三)談了	雙嚴院本	於大原、頼昭	大毗盧遮那成佛 經疏 (日光天海藏)	仁平元年 (一一五一) 点了
師本云	康平四年(一〇六一)奉誦了 朱点 同七年重奉受了墨点	於雙嚴房経藏 於南泉房		建立万荼羅護摩 儀軌(青蓮院吉 水藏)	康和四年 (一一〇二) 書写伝受了
本記云	康平六季(一〇六三)奉写了 延久二年(一〇七〇)奉受了 承暦二年(一〇七八)奉誦了	於和泉国日根郡 於勝林院 南泉房	範胤 範胤 同聽良祐・證 嚴	金剛頂瑜伽中略 出念誦経卷四 (醍醐寺藏)	承暦四年 (一〇八〇) 範胤点了校了 勝林院上綱 大師御本
本云	寛徳二年(一〇四五)校勘了 承保二年(一〇七五)写・校点 了	延暦寺藏本也 以実相房本	良意	仁王経念誦法 (東寺金剛藏)	元永二年 (一一一九) 書写 保安元年 (一一二〇) 奉誦
本云	承暦四年(一〇八〇)伝受立印 了 移点了	於谷	仁豪	仁王経念誦法 (高山寺藏)	院政期書写 加點
已上本比記	承暦四年(一〇八〇)令書写移 点了 書写移点一交了	以法輪院御本	寛猷記 延猷記	佛説毗沙門天経 (東寺金剛藏)	久安三年 (一一四七) 書写、移点

この表から次のことが知られる。

写本記云	應徳元年(一〇八四)書写移点	隋南泉房	範胤記	十六尊井二十天	安元二年
奉受		以祖師定心院供奉本		印相(石山寺藏)	(一一七六)
				写了	

第一に、「本云」等の本奥書を記すことは、院政期の書写加点本に見られることである。それ以前の平安初期・中期には全く無く、平安後期も承暦四年(一一〇八〇)に範胤が勝林院上綱大師御本を請うて点校したものが管見唯一の例である。⁽³⁴⁾但しその本奥書は同じ範胤が延久二年(一一〇七〇)に勝林院で奉受し、二年前の承暦二年に南泉房で奉読したもので、院政期の場合とやや事情を異にするが、承暦二年は院政期の始まる十年前であるから、その走りとも見られる。これを含めて、それらは三井寺と延暦寺との天台宗の資料が主である。このように見ると、「本云」等の本奥書を記すことは、院政期における天台宗の訓点本の一般的な傾向であったと考えられる。

第二に、本奥書に記された年紀の最も古いのは三井寺の慶祚阿闍梨に係り、十世紀末十一世紀初のものであることである。前節において、同一の訓点資料に異種の訓読の併存したことを示す用語の見られる最も早いものが、三井寺の文慶(九六七—一〇四六)が長保六年(一一〇四)に慶祚から受学した経巻であったことを述べたが、それと時期が符合するのは偶然ではなく、平安後期十一世紀初頭の前後から経巻の訓読文が丸ごと伝受され尊ばれるようになったことと関連している。即ち、院政期の天台宗の訓読文そのものの直接の源は平安後期にあり、その早いものでも平安後期初頭前後であると考えられる。その祖点本が異説と共に書写移点されて院政期に伝わったことをこれらの本奥書は示している。

奥書に「本云」などの用語と共に、元の点本の識語をも記すことが院政期の天台宗で一般的になったのは何故であろうか。既に見たように、天台宗では経巻の訓読文について祖点者の訓読した一つを忠実に伝承するだけでなく、同一の経巻に第二、第三の訓読文が考案され、平安後期にはそれが併記されたり、後進によって次々と追記されている。天台

宗の革新的な自由批判の学問態度の現れであろう。そのように併記・追記された複数の訓読文を持つ訓点本を、そのまま移写移点する場合、それぞれの訓読文の拠り所を明示することは基本的には必要であつたであろう。しかし、院政期には、移写移点に際して、元本にあつた異種の訓読文の色分けを厳密にしなかつたり無くしたりすることが生じ、関連して異種の訓読文の前半後半の入替えや部分的な入替えによる混淆が行われ、更に「以他本移点」することや、移写移点者の自らの「改点」や「私ノ付加」が行われるようになる。そのような風潮が多くなると、对症処置として祖点者はじめそれぞれの訓読文の所拠を「本云」として明示することが一層必要となつたのであろう。「谷根本点本」「井房根本点本」³⁶「谷第二伝点本」などの用語が現れるのもその一つであらう。

この風潮と連動して訓読の源流を遡る動きを示す用語や人名も見られるようになる。右掲の表の最後に掲げた、安元二年（一一七六）書写の十六尊并二十天印相の本奥書において、範胤は応徳元年（一〇八四）に南泉房に随つて書写移点し奉受するに際し、「以祖師定心院供奉本」と記すが、この後に「祖師者明靖供奉也」と記している。明靖は天曆六年（九五二）、応和三年（九六三）の点本奥書に名が見られる天台宗の僧で、円仁の流を汲み、長意、玄昭、尊意、智測、明靖と受法した。それが弟子の静真から皇慶へと伝わっている。青蓮院吉水藏の大毗盧遮那經の寛治三年（一〇八九）移点本には、明靖が師の戒壇阿闍梨智測やその兄弟子の理智房阿闍梨志全から受学した本奥書を載せ、「此卷朱点戒壇青点理智房」³⁶（巻第六奥書）など記している。しかし、この戒壇阿闍梨智測や理智房志全の訓説はその一部が部分的に伝えられているに過ぎない。

同様に、円珍の流れを引く敬一（天曆三年、八十一歳卒）も、良勇（康済の孫弟子）と共に、池上律師浄光房頼尊（一一〇二—一一〇九）の金剛頂瑜伽蓮華部心念誦儀軌の本奥書を伝えた天永三年（一一二二）の書写移点本の中にその名が見えるが、その訓説の極一部が部分的に伝えられて残っているに過ぎない。³⁶

これらの平安中期の天台宗の高僧の訓点本は現存せず、その訓読文そのものが院政期の点本の本奥書に伝えられるこ

ともない。訓説の一部しか伝わらないことが、本奥書に平安中期の高僧の訓点本が無いことに関連する。院政期の天台宗の訓読文そのものの直接の源は、「本云」に現れたように、溯つても平安後期初頭前後であり、その訓読文が直接に院政期に伝えられて、所謂、訓読の固定化を起したのである。「本云」はそのことを顕著に示すものである。

七、奥書の用語に基づく漢文訓読史の時期区分

平安時代の訓点資料の奥書を年次に従つて列べて眺めると、共通した用語の類別が出来る。それが一定の時期に集まつていることが知られる。しかも、訓読という本邦で漢文を学習し読解する行為の変遷に伴う必然的な理由に裏づけられている。このことは、前節までに述べた通りである。

そこで、その用語に基づいて時期区分をすると、次のようになる。

第一期——漢文の訓読が講師の講読を聴聞する形式で行われた時期——平安初期九世紀

第二期——南都で講師の講読を聴聞する形式が行われるのと並んで、天台宗・真言宗で新たに「伝受」と「点」

「読」が行われた時期——平安中期十世紀

第三期——南都でも「点」を用いるようになる一方、天台宗・真言宗で同一の訓点資料に異種の訓読が併記されるようになる時期——平安後期十一世紀

第四期——奥書に「本云」「点本云」等の本奥書を記す天台宗の資料群が現れる時期——院政期十二世紀

この時期区分は、西暦紀年の凡そ百年毎の推移に対応するが、西暦紀年によつて峻別されるのでなく、その境界では事象の出現に多少の前後がある。それは、言葉の問題として当然であろう。

このような時期区分の上に、訓読語や訓読法が具体的にどのような変化として現れるかは、漢文訓読史の本格的な課題である。

注

- (1) 大坪併治『平安時代訓点語の文法』昭和五十六年(一九八一年)八月、風間書房刊。
「平安時代」における
- (2) 小林芳規「漢文訓読史上の問題——再読字の成立について——」(『国語学』第十六輯、昭和二十九年(一九五四)三月)。以下の訓読史に関する諸論考。
- (3) 「奥書」は、狭義には「書籍の終りに其の著作若しくは伝来其の他の事項が附載」されているものであり、「識語」は「元来当該本にはなくして、後人が加筆した跋文・奥書等の類」をいう(川瀬一馬『日本書誌学之研究』附載、「日本書誌学用語略解」とされるが、訓点資料の終りに記されたものには、この両者を併せ持つものがあり、又、弁別し難いものもあるので、ここでは広義に解して「奥書」の用語を使うことにする。
- (4) 『敦煌宝蔵』(中華民国七十五年八月等初版本)に基つき、大英図書館蔵の原本調査と同図書館のシャイルス目録(LIONEL GILES『Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum』LONDON 1957.)による。
- (5) 朱点については、石塚晴通「楼蘭・敦煌の加点半」(『墨美』第二〇一号、昭和四十五年六月)、同「敦煌の加点半」(講座・敦煌)第五卷『敦煌漢文文献』平成四年三月)。
 角筆点については、小林芳規「敦煌の角筆文献——大英図書館蔵『観音経』(S.556)の加点半——」(『訓点語と訓点資料』第九十六輯、平成七年九月)、同「敦煌文献に加点半された角筆の符号と注記及び本邦の古訓点との関係」(『訓点語と訓点資料』第一〇〇輯、平成九年九月)。
- (6) 注(5)の石塚晴通「墨美」第二〇一号による。奥書も同号所収写真による。
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 注(6)に同じ。
- (9) 注(5)の小林「敦煌の角筆文献——大英図書館蔵『観音経』(S.556)の加点半——」参照。

- (10) 注(6) 文献参照。
- (11) 築島裕「大日経疏訓説の源流と伝承について」(「訓点語と訓点資料」第一〇二輯、平成十年九月)。
- (12) 拙著「平安鎌倉漢籍訓説の国語史的研究」五〇一頁。
- (13) 敦煌の加點本の奥書には、先掲のように、四分戒本疏卷第四(S.6889)に「接統及点勘並了」、維摩詰経卷上・中・下(S.4153)に「点勘了」とある。
- 又、天台宗の智證大師円珍が、在唐中の大中十二年(八五八)に、台州開元寺で釈観無量寿経記を読んで、先輩僧の高願、興持(興行)、大師妙教(教法)と共に点を施し、更に「看過」したという記文が、次のように伝わっている。
- (三月) 廿五日勘過、日本比丘珍記
- 「比丘円珍、敬同先輩高願、永々興持(考、持年譜作行)、大師妙教(考、妙教年譜作教法)廿八日、点過記之、四月一日、已前更看過、珍記」(朱書) (注(5)の小林の「訓点語と訓点資料」第一〇〇輯所収論文)
- これによると、「点過」と「看過」がほぼ同義で使われている。円珍は園城寺藏の金光明经文句(唐時代写)の奥書にも「巨唐大中十一年八月十三日於天台山國清寺勘過日本比丘圓珍記」と使っていて、本文中に施された朱書の科段(鈎や丸等)と句切点と本文校異とが、この「勘過」に当ると見られる(前掲の注(5)小林論文)
- 「勘」は本邦の訓点本では、自ら考案して点を施す場合に用いている。
- (14) 注(13)に所掲の小林論文。
- (15) 漢文の本文に句切点を施すことは、溯って奈良時代の正倉院文書に見られる。天平十七年(七四五)以前に書写され正倉院に伝わった『李善註文選拔萃』には、本文と同筆の句切点が墨点で施されている。内容上、段落の終りに当るので段落末を示す点と見られている。同種の句切点は敦煌文献に見られるものであり、漢籍の『李善註文選』は大学寮の教科書として将来され読解されていたから、中国大陸の加點方法が漢籍の本文を通じて伝わった可能性がある。この文献に句点の存することは春日政治博士の既に指摘された所である(「初期点法例」)。
- (16) 但し、真言宗の石山内供淳祐も『辯中辺論』等の奥書に「聞」の語を用いているが、『辯中辺論』『妙法蓮華経玄贊』は南都古宗の書であり、古宗の内容に亘っても研学していた反映であろう。

(17) 「見了」は平安後期十一世紀になっても、南都では稀に見られる。しかし同時に新しい「点」の語と共に用いられている。

○成唯識論述記第五末 一卷 知恩院藏(喜多院点)

(奥書) (朱書) 「康平四年(二〇六一) 六月二日申時点已了 興福寺住僧」^{〔墨消〕}「求法」(下略)

六月從一日至八日見了／法相大乘宗

(18) 「平源」「三嶋聖」は未詳であるが、築島裕博士は「九州地方に伝播してゐた天台宗の点本の一つではないかと思はれる」とされる(『平安時代訓点本論考研究篇』五〇九頁)。

(19) 注(18) 文献七八〇頁。

(20) 注(18) 文献六一七頁。

(21) 注(18) 文献六一六頁。

(22) 中田祝夫『古点本の国語学的研究研究篇』一〇七頁。但し「延長」を「延喜」と誤っている。延長三年(九二五)は延喜三年(九〇三)からは四半世紀降る。

(23) 注(12) 拙著八一八頁。

(24) 注(22) 文献三七七頁。

(25) 拙著『角筆文献の国語学的研究研究篇』五六四頁。

(26) 注(5) の小林「敦煌文献に加点された角筆の符号と注記及び本邦の古訓点との関係」(「訓点語と訓点資料」第一〇〇輯) 参照。

(27) 注(26) 文献。その文章は次のようである。

故探源法師随余聽過一部了、始於三井寺迄冷然院也、此一人不闕而了此事也、厥時委悉説過本、元修禪大師御本、爰宗叡師在住東寺、值聽説縁、暫借件积、十四卷本也、故法勢師兄、以聞法志、借授之説、叡得之聽過了、仍叡入唐間、權寄余辺、依彼本、文字分明兼同点、故加看過、若不称者、以朱汚点、与憲源二同法、始説与之、源一人全聽周遍、今朱点是也、叡師帰来後、請還点本、若存執論不可返、據今非同宗之人故、然存平一之意、快返与了、計ルニ彼童子見朱寒熱、雖然僱用一句、遠為結縁耳、今留斯本、充傍扶者、為知彼案内、兼存源同法之勞也、坊内并三井寺同道会此趣、充伝持之資、莫出

山院、努力努力、又禪生故修大徳本一部、得安瑤禪師相許了、便不可返、以彼寺有故堅慧内供奉点本黄色也、聽過家兄修大徳説也、故瑤禪師許置本山畢、同法並知彼由縁、仁和肆年拾月貳拾五日珍記

ここに「点」と共に「聴説」の用語もある。宗叡（東寺長者、第一代天台座主の義真に学び円珍に両部の密法を受く）が東寺に在任の時、「聴説」の縁に値つたと記している。それに「点」が施されていたことも分る。

(28) 注(26) 文献。

(29) 松本光隆「平安時代における金剛頂蓮華部心念誦儀軌の訓説について」(『小林芳規博士退官記念国語学論集』)。

(30) 注(29) 文献。

(31) 注(18) 文献七七〇頁。

(32) 注(18) 文献三九〇頁。

(33) 注(22) 文献四七〇頁による。

(34) 東寺金剛藏三十七尊出生義の「天喜五年(一〇五七)九月廿四日書了」の本には、卷末に白書と朱書とでそれぞれ「本云以大師御手跡書了云々、一度交了以他本可見合也」と記されている。「本云」には年紀が無い。天喜五年のものとすれば平安後期の例となるが、「本云云々」や「以他本可見合也」の用語が院政期に一般的なものである点から見て、或いは後筆の可能性もある。

(35) 注(25) 文献。

(36) 注(29) 文献。